

# 佑啓

## 道産考

ゆうけい

発行 者  
社会福祉法人 佑啓会  
理事長 里見 吉英  
〒290-0265  
千葉県市原市令富1110-1  
TEL 0436-36-7611  
FAX 0436-36-7612  
編集 者 広報委員会

### 三股 金利

まだ高い月の下、鉄のソリを引く馬の汗は湯気となって立ち上り、体の動きにあわせ規則的に吐き出される白い息が冬の近さを物語る。調教は入れ替わりながら明け方まで続き、白々とした朝の景色が浮かび上がる。共に、一頭また一頭と姿を消し、ようやく静寂が戻る。

北海道の広大な土地を切り開いてきた数々の体躯は既に農耕馬としての役目を終え特殊な形で生を繋いでいる。

寒風吹きすさぶ中、調教場で首をすくめながらガイド役のお兄さんの話を聞くとこんな情景を思い描いた。ここの勝のばんえい競馬は存亡の危機にありながら、企業支援や観光化により、私のようなクラブナントカというツアー客にも昔の姿を今に伝えている。オーロラビジョンも緑の芝生もない砂の直線コースにある二つのコブを一トン前後の巨体が蹄手を乗せたソリを引いて競争するだけのことである。

十一月の初旬。職員旅行の二日目。前日は旭山動物園。人気のスポットであるが動物が動物に見えない不思議な感覚になった。野生の動物と人間はそれぞれ

社の道に足を踏み入れてしまったのだが、施設へ就職がきまつた時には果たしてこれでいいのだろうかか考え込んでしまった。こういうところは聖人君子の智識が消費の日常を利用者と共に過ごし、朝は賛美歌、懺悔の時間、一汁一菜の一膳飯、宗門改め、そんなことがあれば私は悪口雑言を糾弾され、おかわりも許されず、ご先祖様を裏切らなければならぬ。不安は募るばかりであった。しかし、こういうのを世の中では紀要という。中に入れば金勘定に長けた俗人もいれば、ナントカ組の方が似合いたるようなアニイもいてすごく安心したのである。こうした経験を通じて是非、ぜひ、ばんえい競馬とともに生きる皆さんとも酒を酌み交わし、暮らしについて語り合いたいと思味シンシン。衝動を抑えることはできず一人で空想宴会の始まり、ハジマリー！

「まー一杯どうぞ チバケンジンのシセツシヨクインです」

「シセツつたって車事シセツもあや年金ホヨシセツなんてもあるナ 北海道はシエイタイが守つてんだ しってつか」

「ええ まーそれより 朝もハヨからたいへんですネー」

「ホントはネ オキテが厳しくて逃げ出したいくらいなんだけどね、ここで育って、ここで生かされて、みんなそうして生きてきただんだ。ここの信頼関係は、ヤクザなんてもんじゃあねえぞ。始めから家族みてえなもんだからナ 人を裏切るなんてこたあ自殺するよりなもんだっペ」

「オネガイだから怒らないでくださいよ、重いソリ引いて馬もちょっとカワイソなんですけど」

「動物愛護なんていいことだのヤカラには腹立つねえ。オメエもそうか 一緒に生きる苦しさも喜びもしらねえ連中になにがわかるってんだ 馬は人間より信頼できるかな。ナツ そらだろ」

「ソーサ 生まれてから死ぬまで一緒だからネ。子供の病氣はわかんねてても馬の目見りや今日の具合はすぐわかるさネ。病氣になったときのすがたやうな目をされたらナントカしてやんねばと思う。そんなツラサのわかんねえヤツラにとやかく言ってもらいたくねえさ」

「シツレイシマシタ お金のことナシカ聞いちゃってもイデスカ。賞金が安いと思うんですが」

「マリー 行政からも援助を受けてるからネ なんとか生活はできてるヨ ありがてえネ。これはただのギャンブルじゃネエぞ、賭け事だ。ちよつと違うな。伝統文化なんださ。だから守り続けなけりやいけネエし、そのためにみんながんばってる。フツのクイバはスポーツのイメージがフエーけどな、こっちは相撲みてえなモンかな。でも国籍不明になつたらダメだな。」

「オラのおつかあだつて騎手でがんばつてんだ。こういうのを見てくれるファンが少なくなつて寂しいネ」

「昔は開催日の賑わいといったらなかつたね。成坑の街から振病つかつてても来たからね」

「ソーデスカ デ 一つ屋根の下で皆さん暮らしてますけどプライバシーなんてあるんですか」

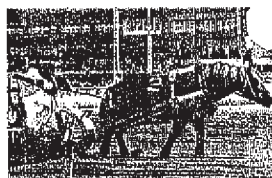
「バックヤロー あのナリー人ひとり大事なこともちろろあるよ。でも気心のしれちゃってる仲間さ。プライバシーとかいってお互いに遠慮とか壁つくってちゃ助けあえねえってことだつてよ」

「ゴモットモデ ママツ もう一杯」

「まーいいってことよ」

なぜか千葉の方言が酒の進み具合と共に延々と続くのであるが妄想にのめりこむ恐れあり、いに加減に聞かすシャンシャン。

競馬と言え、ふる里学舎では中央競馬馬主社会福祉財団から補助を戴いたおれだからと理事長が言う「サラブレッド観戦ツアー」なる福利厚生事業も年に一回実施している。



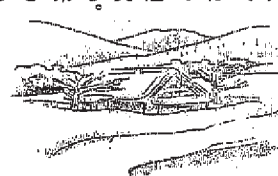
私は未だにナゼ福利厚生事業なのかわからないうが、酒が飲めるといふところをみると福利厚生事業なのだろう。行きの「あさつては新車だもんね」などと大々を夢見た会話はウソのように帰りはみんなシュンとしていた。そして「明日からまたマジメにハタラコ」と福利のない更生事業で終わるのが常なのである。

ここでは観光客としてお金を落とさなければならぬ。金太郎なる予想紙を買い求め参考とした

が全くダメ。またまた更生事業になつてしまった。

それよりも北海道の一角で昔ながらに人と馬の生きるためのレースが関係者の努力によって営々と続けられていることに感動を覚えたのだった。

長時間バス



に揺られ窓外の景色を見てみると、山は既に雪景色である。北海道は特有の歴史をもっている。厳しい自然環境の中で生きた先住の暮らしや北方領土。鈴木ナニガシという代議士の利益誘導もそれが悪いと声高に言えなくなるような感情も湧いた。自然環境も地域性でも住みやすいところでの生活が身にしみているからなのだろう。時代に翻弄される人々の姿も思い起こされた。黒ダイヤと呼ばれた石炭によつて人は集まり、開山の裏面に人は去つた。夕張に代表される地方の疲弊、多数と少数という明確な地域だけでなくどこでも格差という事象となつて現れている。ばんえいに生きる人々も外からみれば少数であるが自信と誇りに満ちているように感じた。同じ毛色の集団があれば、連巻きにして聞わらずという人々や白い目で見える人も必ず存在する。

それぞれが固有の文化を失うことなく融合することはできないのか。暗い夜道を眺めながらジヤパンカップに思いを馳せた。

(大塚福祉作業所 所長)

（小石川・六車佳代子母）

編集後記

「もうすぐ忘年会で楽しみだね」利用者さんの一言。ああ、もうそんな季節があゝ。そういえば、最近すっかり寒さが増してきました。自分で気づくよりも、利用者さんに季節を覚えてもらう事が増えてきた今日この頃。

今年も残りわずか。新しい年が気持ちよくスタートできますように。・・・

そんな願いを込めて、和田達から佑啓六十七号をお届けします。

高橋 宋和